

週刊 ペットだってリハビリ

首都圏

最近、人間並みにリハビリを受ける犬や猫が増えている。「水中歩行器」「酸素カプセル」。これらはペット用に開発された機能回復訓練の器具だ。再び歩けるようになるまで回復するなど一定の機能改善が認められ、飼い主の関心も高まっている。
(藤方聡)

水中歩行器で脚治す

3分の1程度の水位まで温水が入った大型の水槽。温度は温水プールとほぼ同じ約35度だ。ここは横浜市神奈川区の動物病院「ベイサイド・アニマル・クリニック」のリハビリルーム。獣医師の小笠原茂樹(さん、33)に抱えられた真っ白な小型犬が、ウーウーうなりながら水槽に入られた。
水底のベルトが動く。小笠原さんは犬の両後ろ脚を人さし指と中指の間にはさみ、水中でゆつくり歩行させる。スタッフが「頑張って」と声をかける。休憩を含めて水中歩行の時間は約30分。終わるころには、全身の毛は温水でびしょしり。水中歩行器を使ったワンちゃんのリハビリだ。
小笠原はビションフリーゼの雄で13歳。飼い主の同市の主婦村上礼子(さん)によると、7月に椎間板ヘルニアのため突然動けなくなり、同病院で手術を受けた。術後も後ろ脚が思うように動かず、8月から週1回、1時間程度リハビリを受けている。
水中歩行は、浮力で関節にかかる負担を軽減すると同時に、水の抵抗を利用して筋力をつけさせるのが目的だ。各種の代謝機能を高める「酸素カプセル」に入って酸素を十分に吸い込んだ後に、訓練に入る。
「自宅でも後ろ脚のマッサージやストレッチをします。週単位の動きが良くなってきていますね」と村上さんは話す。
本格的なペットのリハビリは、



水中歩行器でリハビリをする犬。9月14日、横浜市神奈川区、関田航撮影

また、日が浅い。欧米では10年ほど前から、国内では2、3年前から広がり始めたという。同病院では、獣医師による診察の後、飼い主と綿密に打ち合わせをしてプログラムを作成し、リハビリに入る。
主な対象は、脱臼や、駆帯が切れてひざや股関節に障害を生じる関節疾患、腰や後ろ脚が麻痺して寝たきりや排便ができなくなってしまうことなどの多い神経疾患など、老齢による関節の衰

●数字でわかる1都7県 獣医師の人数

山梨県 220	栃木県 685
群馬県 546	茨城県 1143
埼玉県 1440	東京都 2929
神奈川県 2258	千葉県 1715

(農水省まとめ、08年12月現在)
The Asahi Shimbun

「療法士」育成に課題

ペットのリハビリに関心が集まり、首都圏ではリハビリ施設の建設を計画する動物病院が増えた。そこで東京都世田谷区の国際動物専門学校は4月、動物看護・理学療法学科を開設した。学生たちは、3年次からリハビリの専門教育を受ける。学生たちの指導に今後あたることになる女性スタッフたちの「教育実習」をのぞいた。
プラスチックの犬の骨格模型に、筋肉、腱、靭帯を模した赤、青、白3色の粘土を女性たちが次々に張っていく。学科長の山下真理子(さん)が英語の教材を使い、筋肉の動きを解説する。「筋肉がどこから始まり、どこで終わるのか、作業を通じて自然と体得できるんです」と山下(川崎市)の獣医師である。米国で研修を受けた動物の療法士の公的資格がないから、始まったばかりだ。
理学療法の専門家だ。山下さんによると、獣医師の養成大学でもこれまでリハビリの専門講座はほとんどなく、「人間の整体法を動物に応用した程度」だったという。
最近では先進地の米国や豪州から専門家を招いて勉強する獣医師も出てきた。しかし、獣医師と一緒にリハビリに当たるスタッフを育てる学校は、国内にはほとんどない。動物対象の理学療法士の公的資格がないからだ。
「犬は種類が多い。理学療法が施せるようになるまでには、一定の経験が求められる」と、兵庫県尼崎市で動物のリハビリに早くから取り組んできた森めぐみ(さん)は指摘する。
高度な知識のある専門家はまだまだ少ない。本格的な取り組みは、始まったばかりだ。